



十五日から早稲田大学の大河内博教授らが、雲と霧の集中観測を始めました。雲と霧は気象学的には同じです。下から見て

富士山に雲がかかっている時、山頂は濃い霧の中にあることになります。そこで霧を採取すれば「雲を捕まえる」ことができるわけで、この分野の研究者たちは山岳の観測に着目してきました。

霧を捕まえる方法はいろいろありますが、化学成分測定には細いフッ素樹脂の糸を束ね、伝わり落ちてくるものを集めます。大量に試料を採取する場合は吸引します。

こう書くと簡単そうですが、霧が出ているような悪天候の山頂では、強風で息ができなかったり、全身ずぶぬれになります。寒さや高山病と闘いながら、必要量の試料を採取するのは楽ではありません。試料が

### 雲と霧

強風で失われることもあります。

体育会系風でバイタリティーの塊の大河内さんが率いるグループは石川県立大、山梨大、徳島大などの研究者も含む大所帯で、東南東山麓、標高一、三〇〇㍎の太郎坊でも通年で観測しており、冬は雪をかき分けて採取します。二〇一一年には福島原発由来のセシウムも検出しました。

今年五月に横浜で「霧と露の国際会議」があり世界の研究者が集まりましたが、そこで大学院生・磯部貴陽さんが学生発表賞を受賞しました。「富士山体を用いた自由対流圏における雲水化学観測」が評価されたのです。グループや私たち裏方の苦勞が報われた瞬間でした。なお、日

本は霧研究の先進国です。

(土器屋 由紀子) 富士

山測候所を活用する会理



事